

ふるさと学習 - 仙台の中学生たちを迎えて思うこと -

山形県最上川流域の村々では、ここ数年、この時期に仙台から中学生が学校ぐるみで体験活動に訪れることが多くなった。日中は、地元の農作業、林業、漁業などを地域住民とともにいき、夜は農家等にホームステイをして地域の暮らしぶりについて語り合うといった活動である。最上川河畔に位置する庄内町清川の筆者の家でも（筆者自身は農家ではないのだが、農業や林業や漁業を研究し、活動をしているということで実態が同じだろうということもあって）、毎年数回は受け入れをしている。

ファームステイとかグリーンツーリズムとか言われるこうした滞在型のふるさと学習活動は、単なる観光業を超えた重要な意義がそこに生まれているものと思う。特に東北地方において、その意義について地元暮らし人々ももっと自覚的であってもよいだろうと思う。

都会を中心に住む子どもたちにとっては、普段接することのない、農山漁村の暮らしを体験することができる。指導者(学校の先生はもちろん受け入れ側の方々も)がきちんと参加者の注意を引くことに成功できれば、子どもたちは日々の食べ物の生産の現場、自然環境を巧みに生かして生業を作っていく知恵や技術、そして農林漁業の苦労や喜びを目の当たりにすることができるだろう。それは「命の教育」というテーマを最も自然な形で受け止める契機でもある。このことは普段の都会の学校生活の中ではなかなか達成できない生きた学びを凝縮して行うということができるということを示唆しているだろう。

子ども達だけではなく、この活動にかかわるムラの人々にとってはもしかするともっとたくさんの意味を持っているのかもしれない。ムラには豊かな自然や暮らしの知恵や技術があるが、それは地元住民にとってはあまりに日常的なため、その価値になかなか気がつきにくい。それを子どもたちは気がつかせてくれる。ムラの森や川を案内していると「これは何ですか」とすぐ質問が来る。ナタを振るい間伐した木の枝を払っているときや、長い竿を操って川舟を操作しているときなど子ども達から「すごいですね」「こんなことができるんですね」と感嘆の声があがる。こうした単純なやり取りからも自分たちの普段行っていることが子どもたちや他の地域では特別で価値あるものだということに気がつかされる。それは、ムラに生きる意味を改めて見つめ直し、その意義を再考する契機となる。このことこそ、これからのムラを生きるために必要な様々な潜在的な可能性を掘り起こす素地となるのだと思う。

筆者からするとファームステイとかグリーンツーリズムとか、横文字で大げさにとらえなくても、取り組み自体はそれほど複雑で難しいものではないとは思えない。要は都会から子ども達（だけに限らなくてもよいわけだが）が農山漁村を訪れ、地域に住む人々とのコミュニケーションを通じながら暮らしや文化、自然を学んでいく。地元住民もまたそのようなコミュニケーションを通じて農山漁村の暮らしや生業を元気にしていこうとする、ということだ。とてもシンプルで素朴な試みであると言えよう。

だが、昨今のツーリズムの潮流の中で、農山漁村の滞在型ふるさと学習活動は、ある意味で試練に立たされているように見える。「あれをきなさい、これをきなさい」「このような受入体制を作りなさい、対応はこのようにきなさい」という暴力的命令がそここから発せられるようになってきた。そこには暗くいやしい利権の影も垣間見られるようだ。ムラの受入側にとっても訪れる子どもたちにとっても、東北の農山漁村のありのままの暮らしや生業から学び合うことに価値を置いているはずだ。しかしこうした声はせつかくの多義的価値を持つ活動を単なる商業主義的ツーリズムに貶めてしまうことになるだろう。

受け入れ農家や子どもたちが本当の意味で主体となる素朴で温かい農山漁村のふるさと学習が安心して行えるように、行政も観光業者もムラや今の子ども達の実態から謙虚に学んでいく姿勢が求められている。